

春の遭難者

作・滝本祥生

人物

鈴木美和(28)ふもとのスーパーの娘、このロッジの持ち主の孫。

紺野由宇(36)ロッジのリーダー的存在。

沢渡 光(30)システムエンジニア。

若林緑里(32)イラストレーター。

伊勢田翔子(21)法科大学院を目指す学生。

堀内慎吾(30)遭難者。

時と場所

早春。福島県山中のロッジ。

4月初め。

季節外れの大雪の日の午後2時頃。福島県山中のロッジ。

上手はキッチンへと繋がっている。

中央に置かれたテーブルと数脚の椅子は住人が食卓として使われている。下手には階下へと繋がる階段がありその脇には大きなストーブとロッキングチェアが置かれている。

舞台前面には窓があり、雪深い早春の山中の様子が伺える。

この家に配達に来た麓の雑貨店「鈴木スーパー」の娘、鈴木美和が何やら深刻に考えている様子。机にはたくさんの封筒が置いてあり、宛名ラベルを貼る作業の途中らしい。上手のキッチンからこの家の住人、紺野由宇の声が微かに聞こえている。

美和 ……(止まっている)

由宇の声 そう……なら大丈夫ね、わかった。

美和 ……(止まっている)

由宇の声 ……うん……うん……うん……良かった。……了解……気をつけて、光ちゃんにも言つとくから。……はーい。

そこへ由宇が入って来て。

由宇 (少し笑って) 緑里ちゃん達大丈夫だった。

美和 はい？

由宇 峠越えてから雪が強くなったから。

美和 え？

由宇 今の電話……、だから緑里ちゃんたち、無事に帰って来れそうって連絡が。どうせなら早く連絡を……ねえ。(思い出して)あ、そうだ
光ちゃん……。

出て行こうとする由宇。

美和は由宇に向き直り

美和 (遮って) あの、紺野さん！

由宇 はい。

美和 紺野さん。

由宇 何？

美和 紺野さん……。

由宇 3回も呼ぶ必要がある？

美和 (意を決して) いいんですか？ 今夜、泊めてもらって。

由宇 ……うん。

美和 イヤーやっぱ悪くて。

由宇 だからいいって。

美和 注文届けに来て、泊めてもらうとは。

由宇 仕方ないでしょう？ それに内職だって手伝ってくれてるし。

美和 でも、元々は私が、お手洗い貸してっておねげえしたから。

由宇 お茶、勧めたのは私。

美和 私がランプをやりたかって……

由宇 ……予想出来なかったもん、あんなにいいお天気だったのに。

美和 はい……。今年は、もう終わりだって言ってたのに雪。

窓から大雪を見つめる二人。

由宇 (美和の手元を見て) ああ。

美和 ?

由宇 これ、全然進んでない。わ、歪んでる。

美和 イヤーやってみると難しいものですね、宛名ラベル張り。

(ラベルを掲げて) コレ、一枚何円?

由宇 さあ……でも、時給にしたら400円くらいじゃないかな。

美和 (驚いて) い。うちの店でも時給750円ですよ?

由宇 (驚いて) そんなに貰えるの? 鈴木スーパー。

美和 ……まあ、スーパーとは名ばかりの、寂れた雑貨屋ですけど。

由宇 でもこの村には不可欠。

美和 イヤー、お年寄りとお登山客のお陰で何とか……ハウレンソウは作れても、灯油や醤油は畑で採れねえですから。

由宇 あ、私たちも作ったのハウレンソウ。あとジャガイモや大根。

美和 (驚いて) すっかり農家じゃないですか!

由宇 (嬉しい) まだまだ……出来るだけ自給自足して、村に馴染んで行かないと。

美和 もう馴染んでますよ。

由宇 だから時給400円で十分。お家賃もみんなで出してるし。お金使うこともないから。

美和 なんだろ。

由宇 ……はい。

美和 え?

由宇 貼り直し。

美和 全部?

由宇 ……。

美和 ……すみません。

由宇 ゆっくりでいいから丁寧にやってね。定評あるんだから「正確で美しい」。こう貼って……こう。

美和 こう……。

由宇 そう……。

作業に戻る美和を見届け、再び雪に目を移す由宇。

由宇 よくあるの？

美和 え？

由宇 こういう雪、もう4月なのに。

美和 まあ山だし。

由宇 麓から、たった三十分なのに……？

美和 (呆れて) だばー、これだから都会の人間は……あのねえ、山の天気は変わりやすいんです。特にこの時期は。山さ入って帰って来れなくなることもあるんだから。

由宇 へえ。

美和 遭難でもしたら、救助に駆り出されるのは村人です。山を甘く見ちゃいげね。単独登山なんて自殺行為です、危ねえす。

由宇 (驚いて) いるの？ そんな人。

美和 流行ってるそうですよ？ 都会に疲れて、一人で山登りする人。

由宇 へえ。

美和 今朝も、そんな若者に道を聞かれました。何も山へ来て一人になること無いのに、ねえ？

由宇 ……。

美和 2度目でしたっけ？ 紺野さん、この山の冬。

由宇 うん。……一昨年の秋だったからここへ来たの。

美和 あ、じゃあ秋祭りは？ この村唯一の娯楽で。トンガラ節。

由宇 ……トン？

美和 トンガラ節。伝統芸能の踊りです。みんなでこう……。 (踊る)
由宇 知らない。

美和　じゃあ今年は参加してくんちえ、婆ちゃんにも言っときますから。

由宇　ありがと。

美和　いえいえ。

由宇　ホント感謝してるの。美和ちゃんが注文届けてくれるから、何とかこの生活が、だからって泊めてもらおうわけには……。

由宇　まだいう？

美和　(立ち上がり)やっぱり私、帰ります。

由宇　待ってよ。どうやって帰るの?!

美和　……。 (立ち止まり)

由宇　ダメよ。

美和　だどー……

由宇　もしも遭難でもしたら大家さんにお婆さまに何ていうの?

美和　あ……。婆ちゃん、今、入院してて。

由宇　(驚いて)入院!?

美和　ええ。一昨日から熱が下がらなくて。……流感……インフルエンザ、一応、大事を取って……

キッチンへ消える由宇。

美和　あれ?

入居者の沢渡光が突然リビングに入ってくる。

分厚いジャンパーを羽織り入ってくる。

光　由宇さんは?

美和　え?

光　由宇さんは?!

美和　あ、えっと……あれ?……

光　(しびれを切らして)ったくもう……

光 退場。

入れ違いに戻って来る由宇、上着を着ている。

美和 あ、紺野さん。今、光さんが……（気付いて）どこさ行くだ？

由宇 お見舞い、お婆さま、どこの病院？

美和 だど雪！ 雪！

由宇 （気付いて）ああ……やだ、つい。

美和 お気持ちだけで。もう退院ですし。大事を取って入院しただけ。

由宇 そう……（美和の手を握り）お大事にねえ。

美和 （笑って）言っときます。

由宇は上着を片付けに退場。

美和 （奥へ）ありがとうございます。

由宇 （奥から）旦那さんに連絡は？

美和 さつきメールを。お陰で充電切れちゃって。

由宇 電話ならここの使って。

美和 ええ。……それにパジャマ、歯ブラシに、バスタオルも。

由宇 下着は光ちゃん、新しいからって。

美和 なんかすんません。

由宇 （出て来て）嬉しいの、お客さんなんて来ないし、いい刺激になる。

美和 はあ……

由宇 今夜は伊勢田さんの激励会だし、人数は多い方が。

美和 伊勢田さん？

由宇 三か月前に越してきて。会ったことないと思う。部屋から出てこないし。

美和 ええ。

由宇 （気を取り直して）伊勢田さん、法科大学院目指してる受験生なの、将来は弁護士さんになるって。

美和 弁護士さん！

由宇 だからホント、ホント大歓迎だから。

内職の作業を手伝う由宇。
そんな由宇の横顔をじっと見つめる美和。

美和 あのだ紺野さん。

由宇 何？

美和 紺野さん……

由宇 はい。

美和 紺野さん！

由宇 また3回。

光が入って来る。

手には大きな鎌が握られている。

光 (怒って) ちよつと、由宇さん何してるんですか！ 心配じゃないんですか？

美和 (驚いて) か、鎌！

光 これは、雪囲いの修理に使って……。

由宇 (笑って) ごめんごめん。

光 翔子ちゃんと緑里さん帰ってこないんですよ、もしも遭難でもしたら……

由宇 さつき電話あった。もうロτζジが見えたから大丈夫だって。ほら、緑里ちゃん目がいいから……

光 知ってます！ 帰って来ましたから！（と、鎌とロープをテーブルへ置く）

由宇 ロープは戸棚、鎌は工具箱ね。

光 つたくもく

と、光はキッチンへ。

光 っつか、電話あったなら言ってくださいよ、ずっと外で待ってたん

ですから！

由宇 さつき。ホントさつきなの、電話。

光 そういう問題じゃない。つたく。……車、壁際にピッタリ付けとい
たからね、美和ちゃん。

美和 ありがとうございます。

光 (出て来て)あれ、相当雪かきしないと出られないと思う、はい車の
キー。(由宇に)一応、外に出たものは全部しまいました。

由宇 ありがとう。……はい。(内職の段ボールを光に渡す)

光 はあ？

由宇 全部終わった。

光 つたくも〜(と、再び下手へ退場)

美和は光が行ったのを確かめて

美和 あの……！

由宇 ん？

美和 実は私、旅行とか殆どしたこと無くて、

由宇 何？

美和 生まれも育ちもこの村で、旦那も幼馴染。

由宇 知ってる。

美和 ……で、さつき考えたんですけど、自分の家以外で寝るのって、
たぶん修学旅行以来で……

由宇 ……？

美和 いやいやいや、高校の修学旅行は体調不良で行けなかったから、
(考えて)そうだ中学校以来だ……んだ！

由宇 何の話？

美和 緊張して。およばれた先でどの様に振る舞えばよいのか……
由宇 (笑って)およばれて……このロッジは美和ちゃんのお婆さまの

物だし。そこ座ってればいいから。そこ……

美和 (言われるままロッキングチェアに座る)

由宇 そう……

美和 それに、もっと正直に言うよ……(立ち上がり)

由宇 何よ。

美和 私、すごく無神経なところがあつて。軽率っていうか、能天気っていうか、

由宇 まあ。

美和 (遮って) よく考えないっていうか、鈍感っていうか……

由宇 だから？

美和 バカなんです。

由宇 は？

美和 違うんです、私の軽はずみな言葉で、もしかすると皆さんを傷つけてしまったらどうしようって。

由宇 ……？

美和 そう思ったら何を喋っているのか、どう振る舞ったらいいのか解らなくて……解らなくて。

由宇 どういうこと？

美和 私には、ココにいる皆さんの様な経験が無いから……皆さんの様な大変な思いをしたことも無いし……皆さんの様な……その……

由宇 ……犯罪被害者じゃないってこと？ 性犯罪の被害者じゃないってこと？

美和 ……

そこへ戻ってくる光。

光の視線を思わず避ける美和。

光 何？

美和 ……(首を振る)

光 (由宇に) 何て？ 緑里さん。

由宇 聞いてない。

光 ……。

由宇 ……(話題を変えて) でも良かったじゃない、あと10分も遅かったら帰れなくなってたもん、美和ちゃんみたいに。(笑)

美和 ……。

光 (美和に) ねえ、宿泊代代わりに配達料金おまけしてよ? ……しなさい。

美和 ……!

由宇 クッキーいただいたでしょう光ちゃん。

光 へーい。

美和 (しおらしく) すんません。

光 ……どうしたの?

美和 ……?

光 ん?

美和 イヤー……

由宇 緊張してるんだって。美和ちゃんは犯罪被害者じゃないから、私達を傷付けるんじゃないかって。

光 なにそれ。

美和 ……すんません。

光 (笑って) いいって。そういうのに疲れて、ここに住んでるのに。

由宇 そう。

美和 ……そういうの?

光 二次被害っていうの?

由宇 理解されないことに苦しんだり、気を使われ過ぎてつかれたり。

美和 はあ。

光 メディアは汚い言葉だらけだし、満員電車も苦手だしね。

由宇 私も。

光 それに上司のオヤジギャグ、下品なヤツ……最低。

由宇 ああ…… (わかるわかると頷く)

光 つまり、特別扱いされるのもヤだけど、我慢して生きるのも違う気がする。

由宇 いい具合に気遣えたらいいんだけどなかなか……。

光 うん。まあ、目に見える怪我してるわけじゃないから。

由宇 ……。

美和 怪我って……まだ癒えてないんですか?

由宇・光 ……。

顔を見合す由宇と光。

美和 ……すんません。

由宇 (笑って) でもココにいとね、安心する、自分のままでいいって思えるの。

美和 自分の、まま？

光 だから、無理しなくていいの。

由宇 まあ美和ちゃんみたいに気を使いすぎる人は、無神経過ぎるくらいでいいから。

美和 はあ。

光 つまり理解して欲しいけど、無理はしないで欲しい……

由宇 そうそうそう。

光 わっかんないかなあこの感じ。

由宇 (笑って)それ余計混乱するって光ちゃん。

笑う由宇と光。

美和 明るい、ですよねえ。

由宇・光 え？

美和 お言葉に甘えて、思い切って発言させてもらいますけど、明るいですよね、お二人とも。

光 うん。

由宇 もっと陰気くさく暮らしてると思った？

美和 まあ……だからびっくりしたんです。もっと、慰め合ったり、励まし合ったり、被害者っていうからこう……

由宇 傷の舐め合い？

美和 なんだ！ ……(気付いて)すんません。

由宇 いいって。私も自分がそうなるまでは思ってたし。

美和 なのにリビングも明るいし、台所も清潔だし、トイレもいい香り。

光 どんな生活してると思ってるのよ。

美和 でも正直、もつと陰気に暮らしてるかと思ってました。陰気な人たちがこう……泣き暮らして。

由宇 (困って)イヤー……。

光 普通よ、仕事もするし、生きてかなきゃならないんだから。

由宇 うん。

美和 仕事って？

光 私はシステムエンジニア、他にもイラストレーターとか。

美和 ……由宇さんは？

由宇 私は農作業と家事全般。

光 由宇さん、これでもお料理上手なの。

由宇 (美和に)好きなだけよ。(光に)これでもって何？

美和 へえ……いい奥さんになりますねえ。(笑う)

光・由宇 ……。

少しの間

美和 あれ？ えっと……？

由宇 (気を取りなおして)つまり私たちはね、今までの自分を失くしたの。全てが今まで通りには出来なくなった。

光 他人のせいだね。

由宇 全部価値観がひっくり返ったから。

美和 価値観？

由宇 でも周りに求められるのは今までと同じ生活、今までと同じ私……

光 ……まあ仕方ないけど。

由宇 外見的には何にも変わってないから。

美和 ……無理しなくていいんですよ、わかりません。

由宇 うん。

光 だからここへ来たの。誰にも気兼ねせず、堂々と生きて行くこうって。だったら楽しもうって憧れの田舎暮らし。(外を見て)まあ、この雪は想像以上だけ。

由宇・光（笑う）

美和 ネットで知り合ったんですってねえ？

光 私達？ うん。

由宇 だからおばあさまにはホント感謝してる。事情を知った上で貸してくれたんだから。

美和 イヤー、ウチも助かったんです、ここ手放さずに済んだんですから。

由宇 こちらこそ。

美和 いえいえ。

光 やつと安住の地にたどり着けたっていうか。

由宇 ……。

美和 無神経ついでに…何で全部話したんですか？

他 え？

美和 婆ちゃんに。…お陰で村中に広まったでしょう？ ……すみません。

由宇 別に隠すつもりはなかったし。私たち、何にも悪いことしてないんだから。

光 そう。

由宇 ちゃんと理解して、その上で貸して欲しかったし。

光 言ってもらって良かったくらい。公表したお陰で、村の人達からも距離取ってもらえたし。

由宇 おばあさん、配達に美和ちゃん寄こしてくれるでしょう？ 嬉しい気遣いじゃない。

光 やっぱり男の人は…ねえ。

由宇 ……。

美和 ここ、今は何人？

由宇 4人。

光 困ってる子たち受け入れて。これ以上増えると、女子寮みたいになる。

美和 既に女子寮みたいですけど。

美和・光（笑う）

由宇 ……生きて、行かなくっちゃ。
他 ……。

少しの間

美和 あ、下着ありがとうございます光さん。

光 それいま言う？ ……洗って返してね。

美和 履くんですか？

光 うん。

美和 ……。

「ただいまかえりました」と玄関から緑里の音がする。
下手に注目すると、若林緑里が入ってくる。

由宇 お帰り。

光 遅かったですね。

美和 お帰りなさい。

緑里 (美和に気付いて)あら、お珍しい。

美和 お邪魔してます。

由宇 良かった、無事で。

光 伊勢田さんは？

緑里 お荷物片付けてます。

光 そ。

緑里 玄関開けっ放しになってましたよ。車の中から見えました。

光 さすが緑里さん、目がいい。

緑里 また光さん？ ちゃんとしてください、危ないじゃないですか。

光 すぐ入ってくると思ったの。

緑里 気を付けてください女所帯なんだから。

光 (呆れて)誰も来ないって、雪だし。

緑里 な！

光 ……

由宇 雪が入ってくるでしょう、気をつけてね。

光 すみません。

緑里 ……。

由宇 で、緑里ちゃん、伊勢田さんの判決は？

緑里 (玄関を気にして) シ！

そこへ伊勢田翔子が入ってくる。

翔子 ……

美和 (立ち上がり) は、はじめまして。鈴木スーパーの鈴木美和と申します。まあスーパーとは名ばかりの寂れた雑貨屋ですけど…

由宇 お帰りなさい。

光 お帰りい。

翔子 ただいま…

美和 お世話になります！

翔子 ……(ペコリ)

キッチンへ消える翔子。

光 (緑里に) で、どうだったの判決。

由宇 懲役は？

光 何年だった？

緑里 シー！

美和 (驚いて) 判決って？ 懲役とは裁判の懲役ですか？ なんて町へ？

緑里 黙って！

他 ……。

緑里 いいですか？ とにかく普通に振る舞ってください。伊勢田さんの前では全く、いつも通り、いいですね。

美和 ……私は、どうすれば？

緑里 (遮って) いいから！

戻ってくる翔子。

全員、急いでテーブルに着き、いたって何もなかった様に振る舞う。

光 ……あ、クッキーあるよ翔子ちゃん、美和ちゃんが持って来てくれた。

美和 ええ。お母さんが焼いたやつですけど。

由宇 す、す、すごくおいしいの、ワサビが利いてて、ねえ。(緊張)

美和 ショウガです由宇さん。ジンジャー、ジンジャーエール。

由宇 (慌てて) 間違えちゃった、間違えちゃった。

緑里 美和さんこそ何ですか？ ジンジャーエールって。(架空のカップでコーヒーを飲む)

美和 ……それ何してるんですか？

緑里 コレはここにコーヒーがあるという設定で、こう……(飲んでみるフリ)

他 ……？

緑里 ほら私って、元ミュージカル部だから。

他 ……ああ。

光 (架空のクッキーを持ち上げ)……どうコーヒー？

何も言わずに出て行く翔子。

光 (怒って) 何よあの態度。

由宇 (慌てて) 間違えちゃった間違えちゃった。

美和 ちよつと緑里さん、なんですかコーヒーって。

緑里 (落ち込んでいる)普通に振る舞うという意識が、先走って。

由宇 美和ちゃんこそ、ジンジャーエールって。

美和 慌てちゃって、へへ。

緑里 (気を取り直して) でもでもでも、全体的には良かったんじゃない

いですか？ ……一体感があつて。

由宇 そうかな？

緑里 ええ。

光 (遮って) どうでもいいのよそんな話は。どうだったのよ、判決。

緑里に注目する三人。

緑里 ……懲役二年、執行猶予三年。

由宇・光 (驚いて) ええ！

美和 ……？

光 (怒って) どうして「強盗強姦事件」執行猶予がつくの？

緑里 犯人は前途ある学生で、まだ未成年だからって。

由宇 翔子ちゃんの将来滅茶苦茶にした奴に前途なんかないって！

緑里 裁判員からしたらあるんでしょう。

由宇 だったら翔子ちゃんの前途は？ 私たちの前途はどうなるの

よ！

美和 ……？

緑里 ……それだけじゃないんです。

光 何？

緑里 知ってる人がいたんです、裁判員の中に。

光 (驚いて) はあ？

美和 どういうことですか？

光 今日、翔子ちゃんの事件の判決が出たんですけど。

美和 その……事件の？

緑里 その裁判に参加してた裁判員が、伊勢田さんの知り合いだったんです。

美和 (驚いて) え……！

少しの間

光 だけど裁判では顔も隠してるし……被害者のプライバシーは守られるはずでしょう？

緑里 裁判所の前でばったり会って……いろいろ話してるうちに…わ

かったって。

由宇 そんな！

光 でも、事件の関係者は裁判員にはなれないはずなのに、
緑里 裁判前に名前をチェックしたんだけど……その人名字が変わっ
てて。伊勢田さんのご両親も離婚されてるでしょう？

光 それで……？

緑里 気付かれたかもしれないって……泣いてました。

少しの間

美和 ……そういうことって、本当にあるんですね。

光 あるの！ 自分だけは大丈夫だって思ってることが、本当に、実際
に、起こるものなの。

由宇 光ちゃん。

美和 ……

緑里 ……裁判員が選ばれる時も候補者全員に、被害者の住所や名前が
公表されて。

美和 (驚いて) え！

光 興味本位で言いふらされても仕方ないってこと。

緑里 訴えるコが減るんじゃないかって心配で。ただでさえ表に出ない
犯罪なのに。

美和 だど、誰にも知られたくないことくらい、わかるはずでしょう？

緑里 わからなかったって。

美和 じゃ被害者の子に、我慢しなさいってこと？

緑里 ……。

光 なぜだかわかる？

美和 ……？

光 「男」が作った決まりだからよ。

他 ……。

光 男なんかにはわかるわけがないのよ、私たちの気持ち。

美和 ……。

由宇 でも、よりによつて、知り合いに知られるなんて……。

緑里 勇気を振り絞つて訴えたのに……。最後まで頑張るつて、言つてたのに……。

光 控訴は？

緑里 ……訴え取り下げらるつて。

光 (驚いて) ダメよそんな！

緑里 私も、その方がいいと思います。

光 緑里さん！

緑里 光さんは、裁判経験したことが無いからそんなことが言えるんです！ どんなに辛いかわからないから……被害者なのに、祀り上げられるんだから。

光 ……。

由宇 吊るし上げね。崇められてどうすんのよ。

光 どっちだっていいの。

美和 あの、控訴つてなんですか？

離れた椅子に座る緑里。

緑里 ……普通に暮らせると思つてここへ来たのに。

美和 ……？

緑里 また、普通に暮らせると思つて。

美和 普通つて？

由宇 ……。

光 ……(ため息) 例えはお母さんのクッキーお裾わけして……おいし
いつて言えて……家族と笑い合つて……いたわり合える。

美和 そんなの、すぐ出来るじゃないですか。

他 ……。

美和 出来るでしょう？

緑里 ……。

美和 ねえ……。ねえ！

住人達の様子を伺う美和。

美和から視線を逸らし、うなだれる住人達。

暗転

第二場

一場から約三時間後の午後八時頃。

夕食後の、だんらんの一時。

歓声と拍手。

明かりがつくと、美和、由宇が下手入口の方を嬉しそうに注目している。

その様子をロッキングチェアに座り、あきれ顔で見ている光。

美和 どうぞー！！（拍手）

しかし何も起こらない。

由宇 伝統なの？

美和 伝統だ。

由宇 なんだっけ、ドンジャラ節。

美和 トンガラ節。

由宇 幸福を呼ぶ踊り。

美和 本当は秋のお祭りなんですけど、この村の唯一の娯楽で。

由宇 全然知らなかった。

美和 今年に参加してくんちえ。

由宇 もちろん。

美和 物置に婆ちゃんの手紙が、その中に衣装があったんです、偶然にも衣装が。

由宇 物置は使っていないから。

美和 なんだく、お陰で助かりました。

光 どうでもいいけど出て来ないわよ。

美和 ……あれ？

下手廊下を見に行く美和。

美和 (廊下奥へ向かって) 何やってるんですか、こっちこっち。

由宇 (見に行こうとして)

美和 由宇さんはダメです。

由宇 どうして？

美和 どうしても。フフ……(と出て行く)

美和は廊下にいるらしい緑里の元へ。

渋々リビング中央へ戻った由宇は外の雪をしばらく見つめている。

由宇 止まないねえ。

光 ……？

由宇 雪……もう4月なのに。

光 ああ。

由宇 あ、スコップ見つかった？

光 玄関に入れておきました。じゃないと明日、外へ出られないでしょう？

由宇 ……。

少しの間

由宇 良かったね、美和ちゃんがいてくれて。

光 ……？

由宇 私たちだけじゃ、翔子ちゃん励まそうなんて思わなかったでしょう。

光 励ます必要なんてありますか？

由宇 なんかにしてあげたいじゃない。

光 なんかにして欲しいですかこんな時。

由宇 だけど、

光 私ならそつとしいて欲しいけど。

由宇 でもね、そういう発想が起らないじゃない？ なんか出来ることがあるかもしれないって、こういうときの為に一緒に暮らしてるのに。

光 こういうとき？

由宇 わかるじゃない。……わかってるって。……それを伝えないと。

光 ……自信、ありませんけど。

由宇 それに、誰かの為に何かしたいって。この気持ちが新鮮っていうか懐かしいっていうか……

光 結局は自分の為じゃないですか？

由宇 (笑って)自分だって、控訴しろって言ったくせに。それでも弁護士になるつもりかって……。

光 それは、翔子ちゃんのことを思えば……。

由宇 なにも押しつけなくなってる、

光 そんなつもりありませんけど。

由宇 お陰で翔子ちゃん、ご飯もそこそこに席立って。

光 ……。

由宇 せっかくあの子の好きなおでん作ったのに。わざわざ美和ちゃんに材料届けてもらって、昨日からおダシ取って。(怒って) 餅巾着作るのが大変だったんだから！

光 ……？

由宇 (咳払い)今日くらいそつとしいてあげてもいいんじゃないかって。

光 (遮って) 由宇さんだって同じでしょう？

由宇 違う、だからこそ私は、

光 じゃ私のせいですか？

由宇 でもせっかくの激励会なのに、翔子ちゃんの気持ちを思えば今日くらい、

光 残念会でしょ？

由宇 ……？

光 激励会じゃなくなってる残念会でしょ、今日は翔子ちゃんの。

由宇 ……。

光は立ち上がり

光 緑里さん、お家賃払ってくれました？

由宇 ……んん、あああ。(誤魔化す)

光 ちゃんとしてもらわないと……今月もギリギリですよ。私も仕事減
ってるし……どうするんですか？

由宇 緑里ちゃんの分なら、私が立て替えるから。

光 由宇さんだって貯金残ってないんでしょ？

由宇 (笑って)見たこと無いクセに私の貯金通帳。

光 わかります。

由宇 わからないクセに。

光 言ったでしょう？ もともと無理があっただですよ、こんな生活。

由宇 知ってる。

光 ……？

由宇 ……イイじゃないの無理があっただって。

光 ……

由宇 無理すればいいじゃないの。

美和が顔を出す

美和 お待たせしましたー！ ……あれ？ もう！

緑里の背中を押して入ってくる美和。

変な浴衣に鉢巻き姿の緑里。

美和の手には調理器具のボウルと菜箸が握られている。

美和 お待たせしましたー！

由宇 (パチパチと拍手)待ってました！

緑里 失礼します (不貞腐れている)。

由宇・光 ……（緑里の姿に絶句）

緑里 （美和に） ……何で私だけ？

美和 だって一着しかないから。

由宇 美和ちゃん、それは…？

美和 衣装です。この村に伝わる、幸せを呼ぶという踊りの。

緑里にボウルと菜箸を握らせる美和。

緑里 ……（不貞腐れている）。

由宇 緑里ちゃん、すてき。

光 確かに、うん。似合ってる…。

他 ……（緑里をしばらく見ているが思わず）フツッ。

緑里 （怒って）笑わないで！（気付いて）あれ？ 伊勢田さんは？

光 お風呂。

美和 なんだー。チャンスは一度きり。翔子さん部屋に入ったら出て来ないそうじゃないですか。（歩いて）この部屋を横切る一瞬で、翔子さんを元気づけないと。

緑里 ……着替えてきます。

美和 だめですよ…：友達が友達の為に何かをする、そこに意味があるんだから。

緑里 だったら由宇さんや光さんでもいいじゃないですか。（由宇と光に）交代しましょう？

由宇・光 イヤー、（無理無理と顔をそらす）

美和 これは緑里さんじゃないと。元ミュージカル部だし。

緑里 関係無い。

美和 ほら緑里さん、さっそく踊って見せてあげて。

緑里 （遮って）いやです！

美和 練習したべ？ ……翔子さんの為じゃないですか！

緑里 ……んもう。（しぶしぶ準備する）

由宇 （光に）始まるみたい。

再びパチパチと手を叩く由宇と光。

美和の掛け声と同時に、渋々奇妙な踊りを始める緑里。
ゆっくりと顔を見合わせる由宇と光。

由宇 （美和に）これは？

美和 トンガラ節です、幸福をもたらすって願いがこもってて。翔子さんを励ましたいって緑里さんが、緑里さんが言うから……

緑里 違うんです、この子が無理矢理。

美和 （制して）続けて。

渋々、踊り続ける緑里。

美和 本当はボウルじゃなくて太鼓なんですけど。丁度これくらいの和太鼓。子供の時から練習して、一人前になるのに十年くらいかかるんだけど。……さすが元ミュージカル部、筋がいいです。

由宇 幸福をもたらすにしては……。

光 地味ねえ。

由宇 ええ。

光 これに十年？ ……きびしい。

美和 やってみると難しいものですよ？ ねえ緑里さん。

緑里 知りません！

美和 本当はもつと大勢で踊るんですけど。こう、一列になって。

緑里を見守る一同。

由宇 ……やってみよっか。

他 え？

由宇 だって幸福が来るんでしょう？ ……私も幸せになりたい！

美和 （驚いて）前向きだべー！

光 こんなんで幸福になれば、毎日ドンジャラやってるって。

美和 トンガラ節。

由宇 ねえやろうよ。

美和 いいですねえ、やりましょう！

由宇 やった。

美和 みんなで練習して、みーんなで翔子さんに幸福を呼びましょう！

光 であー。(イヤだ)

美和 さ、緑里さん、みなさんに教えて差し上げて。

緑里 何で私が？

美和 ミュージカル部。

緑里 関係無い！ もー……行きますよ、光さん。

光 (驚いて) 私？

緑里 早く！

光 であー。(イヤだ)

渋々緑里に従う光、それに続く由宇。

緑里 まず手はこう、足はこうです。

光 こう？

緑里 こう！

由宇 こう？

緑里 こう！

光 こう？

緑里 こうです！ こう！ ゆっくり……1、2、1、2、……

美和 いいです、いい感じですよ皆さん。そうそう、腰かがめるとき背筋は伸ばしてー、うまいうまい！

キャッキヤツと楽しそうに戯れる4人。

そこへキッチンから翔子が入ってくる。

4人の楽しそうな様子を茫然と見ている翔子。

翔子 ……。

由宇 丁度良かった、翔子ちゃんに見せたいものがあるの。ココ座って。

ココ、ココ。

美和 幸福の踊り。

光 どころが。

緑里 (光に) まだまだ、足、足。

美和 (緑里に) すっかりやる気になってるじゃないですか。

緑里 光さんが下手すぎて……これ。

光 言われた通りやっています。

緑里 どころが、

翔子 楽しそうですね。

他 ……？

翔子はキッチンへ。

ジュースのペットボトルを持って戻って来る。

緑里 ああ、そのジュース私の……！

光 (制して) 緑里さん。

緑里 今日町で買ってきて、この辺じゃ売ってないんです。すごく楽しみに取ってて。

由宇 翔子ちゃん、良かったらココ座って。

美和 だから幸福の踊りだ。

ジュースを机に置き、4人に向き直る翔子。

翔子 出て行きますから。

他 ……？

翔子 明日ココを出て行きますから。(美和に) 明日、駅まで乗せて貰えませんか？

美和 いいですけど……

由宇 (驚いて) ちょっと待ってよ、どういうこと？

翔子 言った通りです。

緑里 出て行ってどうするの？

翔子 実家に戻ります。

緑里 待つてください。戻れないから来たんでしょう？ 行くところが無いって言うから。

翔子 戻ります。裁判しないからもう戻れるんです。荷物は処分して下さい。お世話になりました。(行こうとして)

緑里 待つてください！ 出て行くはないでしょう？

翔子 なんですか？ お家賃なら来月分までは置いて行きますから。

緑里 (怒って) そういう意味じゃなくて。

由宇 そうよ、翔子ちゃん。よく考えて……。

翔子 だったらどうすればいいんですか？

他 ……。

翔子 (全員に)ねえ、教えてください。どうすればいいんですか？ 言う通りにしますから。……ねえ！

他 ……。

ジュースを机の上に残したまま出て行く翔子。

由宇 翔子ちゃん！(追おうとして)

光 (遮って) 無駄ですって。

由宇 でも……

光 明日になったら落ち着きますよ。

由宇 ……。

光 落ち着いて、気持ちも変わりますって。

由宇 変わらなったらどうするの？

光 ……

由宇 ココにいなきゃダメだって。

光 結局は自分で乗り越えないと……

由宇 (行こうとして)

光 由宇さん！ 構いすぎですって。

由宇 私が悪いの？

光 そうは言っていないけど！

由宇 そうでしよう？

再び戻ってくる翔子。

翔子 ……(見回して)

他 ……。

翔子 ……(何も言わずにテーブルのジュースを取って去ろうとする)

光 (遮って) 待ちなさい。

翔子 ……。

光 それ、緑里さんのジュース。

緑里 ……。

光 お礼くらい言ったら。

翔子 ……？

光 今日、イラストの締め切りだったのよ緑里さん。それでも心配だから…:あんたのことが心配だから一緒に裁判所まで行ったの。

翔子 ……。

光 片道二時間。一刻も早くイラストあげなきゃいけないのに、夕食も付き合って、こんな格好までして。

緑里 ……。

美和 伝統芸能なんで…:。

光 あんたの為でしょう！

翔子 別に…:頼んでません。

光 一つでも仕事飛ばしたら、次の仕事はなくなるの、個人のイラストレーターなんてそんなもん。わかるでしょう。

翔子 ……。

光 ここへ来たのも緑里さんが声掛けてくれたから…:私達のことはいいけど、緑里さんには挨拶して行きなさい、世話になったんだし。

翔子 ……。

光 友達でしょう。

緑里 私のことはいいですから。

光 良くない！

由宇 どうするの？

翔子 ……。

由宇 プランだけでも話して？ 出て行くなら、心配をかけないことが

翔子ちゃんの責任。

翔子 心配していただかなくて結構ですから。

緑里 そんな風に出て行ったらダメだって。

美和 あの…：差し出がましい様ですけど、ご実家に帰られるなら、その方が安心なんじゃないですか？

光 あんたは黙って。

美和 ……。

由宇 ごめんね美和ちゃん、そういうわけには行かないのよ。

緑里 相手を告訴したことで、事件のことが知れて…：ご家族は恥ずかしくて外へ出られないって……。

美和 そんな…：親でしよう？

光 ココにいる人間はみんなそう…：一番わかって欲しい人にわかってもらえないからココにいるの。

美和 だからって家族なの？

緑里 家族だから。

美和 ……。

緑里 家族だから、娘の身に起こったことを信じたくないし、受け入れられないんです。元へは戻れないのに、戻そうとする…：早く忘れなさいって。全部なかつたことにして普通に生きて行きなさいって。…：忘れられるなら忘れるのに。

他 ……。

緑里 結局は他人ごとなんです。一緒にいると毎日実感する、ああこの人たちは他人なんだって、結局は自分のことしか考えられないんだって……。

光 ……私は、そんな風に思えるだけでもうらやましいと思う。

緑里 ……。

由宇 ね、よく考えて。今戻っても何も。また息苦しくなって、家にいられなくなるって。

緑里 ココにいた方がいいと思う。

翔子 一緒じゃないですか。

他 ……。

翔子 ここも、他人の集まりじゃないですか。

由宇 そうよ、でもわかってあげられるから一緒に……。

翔子 何が解るの？

他 ……。

問

翔子 私はそんなつもりで来たわけじゃありません。行くところが無かったからです。

由宇 今度実家にいられなくなったらどこへ行くの？

翔子 どこへでも行きます。どこだっていいんですよ。実家でもどこでも、山でも、海でも、ゴミ捨て場でも、

由宇 そういうこと言わないで。

光 そうやってずっと逃げるつもり？ 裁判からも友達からもずっと。

事件からも……。

翔子 ……。

光 もう元には戻せないの。受け入れて、それでも生きて行くしかないの、私達は。

翔子 じゃあ皆さんはどうなんですか？

他 ……？

翔子 ここに逃げてるんじゃないんですか？ いくら自分たちの中で取り繕ったって、世間じゃ変な目で見られるんですよ。ロッジの前で時々車が止まるの知ってます？ 村の人がジロジロ見て行くんですよ！ 普通のふりしたって普通には生きられない。こんなところで堂々としたって誰も認めてはくれないんですよ。

他 ……。

翔子 事件のこと公表して戦おうとしたって苦しいことばかり。何で

私のことが世間に知れて、あの男が法律に守られるんですか？　なん
であの男は今まで通り暮らして、私がココなんですか？　これ以上ど
うやって戦えばいいの！　……あなたたちだつてココに居たいんじ
やないんでしょう？　ココにしかいられないだけでしょう？
他　……。

翔子　友達友達つてバカみたい。私はもっと普通の友達がいい。

緑里　……（黙つて翔子に近寄ると、そのままジュースをひったくる）

翔子　私の為つていうならあの男を殺してよ！

他　……。

翔子、下手から出て行く。

美和　どうしましょう……追いかけてみましょうか、追いかけてみましょうか？

光　やめときなさい。追いかけるにしても……あんたじゃない。

美和　……。

由宇　……ごめんね美和ちゃん、今朝まではあんなじゃなかったんだけ
ど。

緑里　これ、みんなで飲みましょう。

由宇　このジュース、大事に取つてたんじゃないの？

緑里　皆さんはいいんです友達だから。さあみんなで、姉妹の「盃」を
交わしましょう！

光　ヤクザじゃないんだから。

美和　私も？

緑里　友達になつて。

美和　はい。

そこへ再び翔子が戻ってくる。

緑里　……なんですか？　謝つたつて遅いですから！　伊勢田さんの

「盃」はないですから！

伊勢田 ……(怯えている)

翔子の様子がおかしい。

そんな翔子の様子によく気付く一同。

怯えている翔子の後ろからゆっくりと入って来たのは、雪に濡れた男だった。

一同 ……!!!

リビングの片隅へ逃げる女性たち。

男は茫然と立ち尽くしている。

堀内 ……助けてください……助けてください。

一同 ……!!!

美和 あああ！ この人！

堀内 ……(力尽きてその場にへたり込む)

美和 ちよつとあんた！ ちよつと！ ちよつと！

美和に揺すられても堀内は動かない。

怯えきっている住人達。

どうしていいかわからず立ち尽くす美和。

暗転

第三場

一時間後の午後九時ごろ。

下手前に寝かされている堀内、薄いブランケットがかけられている。

その奥でヒソヒソと話すこの家の住人達。

そこへ村へ電話を入れていた美和が上手キッチンから出てくる。

美和 何の届けも出てねえって。

他 ……？

美和 やっぱり、この人一人で山へ入って遭難したんじゃないかって。
他 ……。

堀内のブランケット肩までを掛けてやる美和。

その様子を遠巻きに見ている住人達。

美和 警察も、今夜は雪で来れねえって。

光 警察？

美和 ええ、今、電話したんですけど無理だって。

他 (ヒソヒソと会話)

美和 隣村の診療所もちろん、救急車も。とにかく今夜は無理だって。

(堀内を見て) 山へ入るときはルートを知らせるのが常識なのに……。
他 ……。

美和 今朝、道を聞かれたんです。確かにこの人です。店に食料買いに
来て。

美和の様子を見ながらヒソヒソ話す住人。

美和 もっと布団とか無いですか？ コレたぶん流感だと思っ
けど、婆ちゃんもこんな感じで。……温かくして、とにかく
安静にしてろって診療所の先生が…… (驚いて) え？ スト
ーブが消えてる！

ストーブを点けようとする美和。

美和 寒いはず。(確認して)このストーブ灯油が空になってます。

他 (顔を見合わせる)

美和 灯油ありますか？ どこに？ ……灯油を。

ヒソヒソ話す住人達。

美和 あの…！ 聞いてます？ 聞こえてますみなさん。ストーブに

灯油を入れたいんですけど…

他 ……

美和 ちょっと。ねえ。なんか、さつきから様子がおかしいですよね皆さん。何の相談を？ ……いいから、灯油と、布団をください。

他 ……

美和 ねえ、とにかくまずは灯油を…

光 (前に出て)申し訳ないけど美和ちゃん、私達先に寝るから。

緑里 後はよろしくお願いします。

美和 はい。……え？

光 灯油ね。そう知ってる。さつき切れたの。でも、今から付けるともつたないから。

緑里 ええ。もつたない、だから九時消灯、決まりなのよ、この家のルール。

美和 ……？

光 あ、美和ちゃんはどこで寝る？

緑里 (光に)なら、私のお部屋へ。

由宇 そうね。

光 お願い。

美和 え？ 待ってください。どういうことですか？

他 ……。

光 だから夜だし、寝る。それだけ…。

緑里 ええ。

美和 は？ え？ なんで？ ……もったいないってどういうことですか？

他 ……

美和 病人がいるんですよ？

緑里 うん。でも決まりなんです。共同生活においてルールって大切でしよう？ ストーブへの給油のサイクルもルールで決まっています。

光 わかるでしょう？

美和 わかりません。

光 少しでもずれると大変なのよ、また美和ちゃんにお願いして灯油届けてもらわないと。

緑里 ね。

美和 灯油なんていくらでも届けます。

他 ……

光 うん。でも、ま、そういうことだから。

緑里 そういうこと。

光 じゃあ、お先に。

緑里 ええ。おやすみなさい。

部屋へ戻ろうとする住人達。

美和 待ってください！ 待ってください！ 由宇さん、光さん！

他 (立ち止まり)

光 なに？

美和 え？ えええ？ なんで？

他 ……

美和 灯油なんていくらでも届けますから。今すぐ、給油してください！ お願いします！

光 だからそういう問題じゃなくて、

美和 問題？

緑里 つまり、家計簿をつけていてね、毎月の費用が決まっているの。バカにならないのよ、冬の灯油代って。

美和 イヤイヤイヤ。……ええ？ だから。この人、病気なんです。苦しんでるんです。可哀そうじゃないですか。

他 ……(顔を見合わせる)

緑里 でも、まあ……そういうことですから。

美和 そういうことって？ 死にかけてるんですよ、この人。

光 (笑って)ちよ、死にかけてはいないでしょう。

緑里 大袈裟ですねえ。

他 (少し笑う)

美和 苦しんでるじゃないですか！

他 ……。

顔を見合わせる住人達。

美和 ……助けないん、ですか？

他 ……。

美和 待つてください。え？ ええ？ ……この人、苦しんでて、熱があつて……なのに助けないんですか？

他 ……。

美和 灯油どこに置いてあるんですか！ 薬は？ 何かあるでしょ

う？ 風邪薬とか何でも……。

緑里 (困って)ああ。

美和 早く！ この人助けなくちゃ、

翔子 どうして？

美和 ……？

光 だから毛布だつて出したし、言われた通りお湯だつて沸かしたじゃない。ねえ。

他 (うんうんと頷きあう)

緑里 後はホント、美和さんの好きなようにしてくれたりいいですから。

キッチンも好きに使ってくれたらいいし、灯油もその辺に。わからないから病気とか。それにインフルエンザでしょう？ 困るのよねえ。

美和 はあ？

光 じゃあどうしろって言うの？

緑里 とにかく、私達には関係のないことですから。

美和 ……意味が……わかりません。

翔子 だから、助けたければあんたが好きなようにすればいいって言うてんの！

少しの間。

由宇 ごめんね美和ちゃん、これはみんなで決めたことだから。

美和 え？

光 イイじゃないの外じゃないんだから、家に入れて、毛布だって貸してあげてるんだし。

翔子 そうよ、(緑里に) ねえ。

美和 待ってください。ええ？ えええ？ (考えて)……だからこの人、きっと一人で山へ入って……昼に会ったんですこの人と。ここへ来る前、道を聞かれたんですよ。きっと気軽な気持ちで……軽装でしたぶん山菜取りかなんかのつもりで……。

他 ……。

美和 そしたら熱が出てきて……そしたら雪が、四月なのに大雪になって。……遭難して、やっと下りて来たんですよ。手とか、たぶん凍傷になりかかっているし、でも、必死でここまで辿り着いたんですよ？

緑里 (光に)だから戸締りはしっかりしてって言ったのに……

光 さつきスコップを……すみません。

美和 (怒って) 死んじやうかもしれないんですよ！

光 イヤ、だから。

緑里 ええ。

翔子 そんな簡単に死なないって、男でしょう？

他 (イヤそうにウンウンと頷きあう)

由宇 美和ちゃんも言ったじゃない、単独登山なんて自殺行為だって。

美和 由宇さん……？

緑里 ええ。こういうのって自己責任じゃないでしょうか？

翔子 そうよ。

美和 ええ？ そんな……なんで。

他 ……。

由宇 ごめんね美和ちゃん、でもそういうことだから。

緑里 じゃあ私達はお先に……おやすみなさい。

光 おやすみ。(行こうとして)

翔子 おやすみなさい。

美和 ……男だから？

他 ……？

美和 この人が男の人だから助けたくないんですか？

光 (怒って) だから、関わりたくないって言うてるでしょう？

部屋へ戻ろうとする住人達。

美和 ……警察に話します。

美和に向き直る4人。

美和 確か、なんかの罪になるんですよね？ 保護責任者遺棄とか何と

か……

翔子 (美和の前まで来て)話せばいいじゃない、話しなさいよ。何した
っていうの？ まだ生きてんでしょこの男。

光 だから、助けないって言うてるんじゃないの、関わりたくないって
言ってるだけ。

美和 もう関わってるんですよ！ この人は助けて欲しくてここへ来
たし、見過ごすなら助けれないのと一緒にじゃないですか！

緑里 助けてるでしょう？ ここでこうして寝かしてやってるじゃな
い！

美和 ……話しますから。

他 ……。

美和 全部。おばあちゃんにも村の人にも。ココであったこと……皆さ

んの態度を報告します。私も二度と配達なんか来ないし……そうしたら、もうここへは住めなくなりますよ？

翔子 あんた、自分の立場わかってんの？

美和 翔子さんこそ。

にらみ合う美和と翔子。

由宇 うん。よし。わかった。

他 ……？

由宇 だったら説得してくれる？

美和 ……？

由宇 美和ちゃんが私達を説得することが出来たら協力する。

美和 はあ？

光 ちよつと由宇さん！

緑里 さつき話し合ったじゃないですか、これ以上関わらないでおこうって。

光 何もなかったことにして、いつも通りに。

翔子 絶対にイヤです！

美和 (怒って) どうして私が、皆さんを説得しなきゃならないんですか？！

由宇 ……暴力とか、いがみ合うとか……私、本当にイヤなの。美和ちゃんのこと好きだし、ココでの生活も続けたいし。話し合って、納得すれば歩み寄れるかもしれないじゃない。

光 無駄ですよ。

由宇 いいから。……言う通り、もう関わってる。

翔子 そんな……！

美和 (怒って) あのねえ！ この人死にかけてるんですよ！ 呑気なこと言わないでください！

由宇 助けたいんでしょう？

美和 ……。

由宇 だったら説得して。ほら、みんなも座って。

洪々、テーブルに着く4人。
堀内の傍による美和。

由宇 で、美和ちゃんはどうしたいの？

美和 (呆れて) どうしたいって……まずはストーブに灯油を入れてください、この部屋を暖めて何か薬を。解熱剤とか鎮痛剤とかなんでもいい、常備薬くらいあるでしょう？

光 どうして？

美和 助けなくちゃいけないじゃないですか！

翔子 どうして助けなくちゃいけないのよ！

美和 (怒って) 当たり前じゃないですか、傷ついた人は助ける、常識でしょう？

光 何でそれが常識なの？

美和 常識は常識ですよ。

緑里 常識って……何？

美和 (怒って) 何言ってるんですか！ ルールです、社会のルール。この家にルールがある様に、社会にもルールがあるじゃないですか。

緑里 この人を助けないのがこの家のルールだとしたら？

美和 そんなわけ……

光 ない？ どうして？

美和 ……だって皆さん、そんな人じゃねえじゃねえですか。

他 ……。

美和 みなさん優しくして、親切だし。由宇さんは、婆ちゃんが入院したって聞いただけでお見舞いに行こうとして……ついさっきも、皆さん翔子さんの為に踊りを……緑里さんとも友達になれて。見てたらわかります、みなさんはそんな人じゃねえじゃねえですか。

他 ……。

少しの間

光 ……私の何を知ってるのよ？

美和 そりゃあ、何にも知らないけど……

光 どうして聞かないの？

美和 だって、無理して分かろうとしなくていいって光さん……

光 (遮って) 知りたくなかったからでしょう？

美和 ……。

光 あんたが知りたくなかったから聞かなかったんでしょ？

美和 ……。

緑里 それに、この人は私たちと決定的な違いがある。

伊勢田 ……男。

少しの間

美和 え？ じゃあ何ですか？ つまりこの人は男だから助けてもら

えないんですか？

緑里 そうかもね。

美和 そんなこと……！

緑里 ない？

美和 有り得ない。

光 何で？

美和 女だったら助けて貰えて、男だから助けてもらえないなんて……、

緑里 有り得るの。

美和 ダメですよそんなの！

光 なんでダメ？

美和 だって……みんな平等でしょう？

翔子 (笑って) 平等って。

美和 学校でもそう習ったし、法律でも定められてる……、

緑里 (遮って) 平等なんか無いの。

美和 ……。

緑里 平等なんかない。

美和 でも、そんな不公平な……、

光 不公平なのよ。
美和 ……。

間

緑里 私達は女だから襲われた。
美和 ……。

緑里 誰だつて良かったんです。女だからって理由で襲われた、ただそれだけの理由で。

光 つまりね、男だからって理由で助けてもらえない場合もあるってこと。

翔子 少なくともここでは。

光 そういうことが現実にあるってことを理解して欲しい。

翔子 男だから…：死ぬには十分な理由よ。

緑里 まあ死ぬか生きるかは、その人次第ですけど。

他 (笑う)

美和 そんなの理解出来ません。

光 あんたが言ったんでしよう？ ココにはココのルールがある。

美和 でもこの人、何にも悪くないのに。

翔子 じゃあ、私達は悪かったの？

美和 ……。

緑は堀内を見降ろして

緑里 悪いんですよこの人。

美和 ……。

緑里 弱ってるのが悪い…：立てないのが悪いの。…：抵抗できないのが悪い…：無力なのが悪い…：。

美和 そんな理由…：、

緑里 ひどすぎる？ 理由にならない？

美和 当然、

光 そう言われた。

美和 ……？

緑里 あの時、助けを求めた人たちに。事件にあった後、そう言われたの……抵抗しなかったのが悪い、逆らわなかったのが悪い、逃げなかったのが、腕を出してるのが悪い……だって真夏よ？ そんな恰好をしているから、自分から誘ったんじゃないか、女だから悪い。運が悪かったんだって。つまりね、それは生きてるのが悪いって言われるのと同じことだった。

翔子 で、良かったねって言われる……生きててラッキーだった。今死ねって言われた人間に、命があつたことを感謝しろって。誰に感謝を？ 犯人？ 神様？

緑里 こういう事件にあつて、命を絶つ人が多い理由が良く解る。死ねって言われてる気がするのよ、よく助かったって言われる度に、よく生きてるなって、恥ずかしげもなくよく生き伸びたなって。……だって私は……

美和 ……。

光 そうやって過ごして来たの私達は。

間

美和 ……皆さんが辛い目に合われたことは良く解ります。……いえ、私なんかには到底想像できないくらい辛い、辛すぎる出来事だと思うけど……だからって、やっぱりこの人を助けられない理由にはならないと思います。

翔子 頭悪いんじゃないの？ だから理由なんかないって言ってるでしょう？

美和 (遮って) 頭悪いって言ってるじゃないですか！

少しの間。

由宇 誤解しないで欲しいんだけど、

美和 ……？

由宇 助けた方がいいことくらいわかってる。いいえ、助けたい。助けさせて欲しいと思う。

美和 だったら……！

由宇 あのねえ美和ちゃん、そんな言葉じゃ、何にも伝わらないってこと。

美和 え？

由宇 社会とか常識に否定されて私達はココに居るの。

美和 ……。

由宇 それじゃ何も変わらない……。

美和 伝えなくちゃいけないんですか？ 変えなくちゃ、

由宇 そう。

美和 ……だって習ったじゃないですか学校で、常識や道徳。疑ったら社会では生きてはいけないから。

由宇 そう。だから困ってる……だから私達、ここでしか生きられないんだけど。

美和 ……だったら、どうすればいいんですか？

由宇 それを考えて欲しいの一緒に。冗談じゃなく、ずっと考えてる、どうしたら困ってる人を助けられるんだろうって。解らないのよ、何が正しくて、何が間違ってるのか。

美和 ……そんなのおかしいと思います、皆さんはおかしいと思います。

由宇 そう。

光 何よ今さら。

緑里 ねえ。

由宇 言ったでしょう？ 価値観がひっくり返ったって。

光 今まで正しかったことが正しくなくなったの、法律とか警察とか。

美和 でも信じられるものもあるでしょう？ 愛情とか友情とか、

緑里 (笑って)愛情って……

美和 ……？

光 ……私が被害にあった相手は家族だった。実の父親、私はまだ10歳になったばかりで……その時はそれがおかしいってことすら分か

らなくて。

美和 ……。

光 ……今、良く生きてるなって思ったでしょう。自分でもそう思う。だって仕方ないじゃない死ねないんだから、生きるしかないんだから。

美和 ……

由宇 何？

美和 ……(後ずさりして)

由宇 何よ。

美和 ……な、何があっただんですか？ 皆さんに……一体何があっただんですか？

他 ……。(視線を逸らす)

緑里 いい機会じゃないかしら、美和さんにとってもこの人にとっても。社会勉強じゃないかしら、世の中つとつても不条理なんだって言う。

翔子 現実を知れ。

緑里 (制して)伊勢田さん。

美和 教えてください、皆さんに何があっただんですか！

緑里 言ったでしょう？ 関わりたくないって。辛いんですよ私だって。苦しんでるこの人を前にしても何にも感じないから辛いんです。

美和 教えてください。なにがあっただんですか、緑里さん！ 誤魔化さないで。

他 ……

美和 教えてください、由宇さん！ 翔子さん！ ……何があっただんですか！ 翔子さん！

緑里 性犯罪よ。

美和 ……。

緑里 ごく普通の、ありきたりな、一般的な性犯罪。どこにでも転がっているような、誰もが笑い飛ばすような犯罪。……襲われて、捨てられたの。

美和 ……。

由宇 (静かに) ね、美和ちゃんは諦めたことってある？

美和 諦める？

由宇 そう。私達はね……いいえ私は……あの時心底諦めたの。心底っていうしか言葉が見つからないんだけど……心の底から……っついていか、心と体を引き剥がされた感じね。無くなった、諦めたの、生きることとか、希望とか、夢とか、そういうことの全部が消えたの。あの時、私は生きること以外の全てを諦めた。

美和 ……。

由宇 ……もう、区切りをつけたいのよ。

美和 ……？

静かにキッチンの方へ向かう由宇。

戻って来た由宇の手には鎌が握られている。

そしてそのまま、堀内の方へ歩み寄る。

他 ……！

由宇 大丈夫よ、見てるだけだから。ココでこうして、これを持ってその人が死ぬのを眺めてる。残念だけど私には直接手を下す勇気が無いから。……でもココでこうして、その人が死ぬのを見てたら、殺したことと同じでしょう？

美和 由宇さん……。

由宇 今も蘇ってくる、あの時の気持ちだが、襲われながら考えたこと。突然、急に、お鍋のお出汁取りながら私は絶望するの、何であの時死んでしまわなかったんだろうって。私はね、もう二度と思いい描いたようには生きられない。子供の頃思いい描いてた自分に……思いい描いた様に生きられないっていうことはつまり……、

美和 由宇さん？

由宇 つまり、それは死んでるのよ。

美和 ……。

由宇 生きることを選んで……私は死んだの。

長い間。

美和 ……死んでないと思います……由宇さんは死んでないと思います。

由宇 ……。

美和 やめてください、そんなもの捨てて。……もしその人が死んで、何の区切りになるんです？ だって由宇さんはそんな人じゃねえじやねえですか。人の死を望むような、そんな人じゃねえじやねえですか。

由宇 ……。

美和 配達に来たらいつつも迎えてくれて、嬉しそうに。帰るときは見えなくなるまで手振ってくれたじゃねえですか。

由宇 ……。

美和 去年取れた大根だって分けてくれたし、そりゃあ形は悪かったけど、嬉しかったんですから、由宇さんの気持ちが嬉しかったんですから。

由宇 ……。

美和 さっきだって……助けたいって。本当はこの人助けたいって。嘘ですよ、死んでほしいなんて……本心ではそんな風に思ってたじゃねえですか。

由宇 ……。

美和 ねえ、思ってたじゃねえですか。

由宇 (遮って) やめて！ あんたに何が解るのよ！

美和 ……！

由宇 私が許せないのは男じゃない、女よ！ 少しくらい想像できるはずなのに、想像していいはずなのに、理解しようもしない。こんなひどい現実を見て見ぬふりしてる。誰かが作った制度の言いなりになって、バカでいるのが誇らしいみたいにな、つまりね美和ちゃん、あんたみたいなの、あんたが一番ムカつくの！

美和 ……。

由宇 私はもっと努力してた、目標だつてあつた、仕事だつてしたし、社会がどうすればもっと良くなるか考えてた！ ……なのに何で私なの？ 何で私が…！ あんたとどう違うの？ 何であんたじゃなくて私がレイプされるのよ！

美和 ……。

由宇 あなたは私の隣にいた、それだけ……！

美和 ……。

間

由宇 ……運が悪かつたのよその人……私がそうだつたみたいに。

美和 ……。

由宇 良かったね、死ぬのがその人で……美和ちゃんじゃなくて。

他 ……。

光 ……。

由宇 ……（鎌をテーブルに置いて座る）。

その場にへたり込む美和。

うなだれて座る由宇の元に集まる住人達。

美和はしばらく動けずにいるが……やがて少しずつテーブルの方へ這って行く。

美和 それでも……それでもやっぱり思うんです。この人には関係ないって……生きる権利があるって。……思い描いていたのとは違つても、弱くても、生きたい人は生きなきゃダメだつて思うんです、皆さんが生き抜いたみたいに。だから、

他 ……。

美和 お願いします由宇さん、この人を助けてあげてください。

由宇 ……。

美和 この人を助けて……この人を助けてあげて……お願いします、お

願います、お願いします（土下座）

他 ……（美和を見る）

由宇 私達もねえ美和ちゃん、そうやって命乞いをしたのよ。何度も何度も、声を絞り出しながら、地面に頭を擦り付けて頼んだ……他人の為じゃなく自分の為に。

美和 ……。

由宇 言ったでしょう？ そんな言葉じゃ、なんにも伝わらないんだってば……！！

美和 ……。

言葉を失くした美和は、テーブルに置かれた鎌を見つける。

やがてそれを掴む美和、

鎌を住人達に向け、堀内を庇うように立つ。

美和 この人を助けなさい……！！

他 ……！！

美和 いいからすぐに助けなさい！ ……助けなさい！

由宇 やめときなさい。

美和 私は本気です！

由宇 美和ちゃん。

美和 ストープに灯油を！ 何でもいいから薬を用意して、でねえと……でねえと……（困ったあげく堀内に鎌を向ける）でねえとこの人の命はありませんよ！

他 ……？

光 （驚いて）ちよつとあんた、

緑里 何がしたいの？ 助けたいんじゃないの？

翔子 バカじゃん。

美和 だからバカだって言ってるじゃねえですか！ 私はバカなんです！ わからないんです！ 皆さんの気持ちも、法律のことも、自分の頭で考えられねえし、頼まれたらイヤとは言えねえし、バカが恥ずかしいってことに気付きもしねえ！ 自分の意見なんてこれっぽ

ちもありません、これっぽっちもです、たったのコレっぽっちも！

緑里 そんなに強調しなくても。

翔子 バカじゃん。

美和 それでも生きてます！ 生きるしかねえじゃないですか！ 恥ずかしげもなく！ みつともなく！ いやらしく！ 下品に！ 生き恥さらして生きるしかねえじゃねえですか！ 皆さんと同じじゃねえですか！

他 ……。

美和 同じじゃねえですか！

他 ……。

緑里 いいからそれ、離しなさい！

美和 私は本気です！ 本気です！ 私は本気なんです！

美和は堀内のブランケットを剥ぎ、刺そうとする。

が、やっぱり出来ない。

やがて鎌を投げ捨てる。

美和 (堀内に) 無視しねえで！ ……一緒に戦ってよ！！！！

他 ……。

眠っている堀内にすがる美和だが、やはり堀内は気を失ったまま。

美和はフラフラと立ち上がり、そのままリビングから外へ出て行く。
捨てられた鎌を拾い上げる翔子。

光 待つて、どこへ行くの？ ねえ……

顔を見合す光と緑里。

茫然と座る由宇。

光 美和ちゃん？

緑里 (おもわず美和の後を追う)

光と緑里と翔子は美和の後を追う。
動かない由宇。

暗転

第四場

さらに2時間後、午前0時ごろ。

ストーブには火が灯っている。

ロッキングチェアに座り眠っている堀内には毛布が掛けられている。

そこへ下手からパジャマ姿で入ってくる翔子。

男しかいないことに驚き、一旦は怖くて去ろうとするが立ち止り、

翔子はしばらく遠巻きに、眠っている堀内を観察している。

少し近寄ろうとするがやっぱり怖い。

一定の距離を取りつつ、ジーンと興味津津で堀内を観察している。

そこへ下手から風呂上がりの光と緑里がやってくる。

緑里は翔子のカーディガンを持っている。

翔子 ……（堀内を観察している）

緑里 どうしたんですか？

翔子 （驚いて）緑里さん、光さん。

緑里 さつき目を覚まして、こっちの方が楽だからって。

翔子 贅沢ね…：椅子で寝るなんて。

光・緑里 （微笑む）

緑里 風邪薬が効いたみたいですね、熱も下がったし。

光 よかった。

緑里 ええ。

光 （堀内を見て）堀内さん、堀内慎吾さん。

翔子 ふーん。(堀内をマジマジと眺める)

緑里 (カーデイガンを渡して) これ、伊勢田さん、お風呂場に忘れてたから。

翔子 ありがとうございます。

上手キッチンから美和が緑里のジュースを持って出てくる。

美和 ……あ。

他 あ……!

緑里 そのジュース私の!

美和 ちょ、ちょうど良かった、これ、みんなで飲もうと思って。

緑里 嘘。

美和 ホントです、ほら盃。交わしましょうよ姉妹の、あああ、それともクッキー食べます? ……昨日お母さんが焼いたヤツですけど。

他 (シラーっと美和を見る)

美和 歩き回ってお腹すいたべ? そういう時は甘いもんが一番だ。

他 (シラーっと美和を見る)

美和 ほら、遠慮しねえで。

光 ったく、遠慮しねえでじゃねえ。

翔子 (呆れて) ホント人騒がせなんだから。

光 雪の中、どれだけ探し回ったと思ってるの。

美和 ……すみません。

緑里 そうですよ。いなくなっと思ったたら車の中に隠れてるんだから。私の目が良かったから見つけられたもの。

翔子 そうよ。

美和 隠れてたわけじゃありません。もう死にてえと思って外へ出たら大雪で。で、我に返って……。ほら、こんな日に歩き回ったら危ねえべ? で、仕方なく車へ、そしたら寝ちゃって……

光 ったく、こんな日に車で寝たら死ぬよ?

緑里 (怒って) こっちは探し回ってたのに、遭難するところです!

美和 山をあまぐ見ちゃいげね。

光 あんたが言うな。

堀内 (寝返りを打つ)

翔子 (はっとして) シー!

他 ……。

顔を合わせてほほ笑む一同。

緑里 さてと、私はそろそろ。徹夜でイラスト仕上げなくちゃ。

光 今から?

緑里 もちろん。

翔子 手伝います。

光 仕方ないなあ。(美和に) ホントに朝までここにいる気?

美和 はい。(堀内を見て) 病人だし。

光 そ、じゃあよろしく。

緑里 私達も。(翔子を促し立ち上がる)

翔子 さつき、美和さん探してた時……

他 ……?

翔子 一瞬だけど、ホントに遭難するかもしれないって思った。道から逸れて林に入ってた事に気付かなくて。……どうしようって思ったら

緑里さんの声が聞こえて、このロッジの明かりが見えて。……その時、ああ助かったって。昼に判決が出た時は、私なんかもうどうにでもなっちゃえーって思ったのに……嬉しかった。

美和 えがったじゃねえですか。

緑里・光 あんたが言うな。

翔子 ……この人も、ロッジの明かりが見えた時、そんな気持ちだったんじゃないかって……(堀内を見て、そして微笑する)

一同 ……。

緑里 さ、体が冷えるから。

翔子 はい。あ、お水……。

光 後で持ってってあげる。(と、光はキッチンへ)

翔子 ありがとうございます。

美和 おやすみなさい。

緑里 おやすみ。

翔子 おやすみなさい。

2人は部屋から出て行く。

堀内の看病をする美和。

すると光が戻って来て。

光 ねえ。

美和 何ですか。

光 ……。

美和 何ですか。

光 美和ちゃんって……バカじゃん。

美和 まあ、改めて言われると、さすがにイラッとしますけど。

光 っていうか、素直じゃない。

美和 はい。

光 そこで美和ちゃんにお願いがあるんだけど。

美和 ……？

光 ……なんていうか……私はさ、結婚とか子供とか、そういうの無理だから。

美和 何の話です？

光 今の仕事も楽しいし、まあここでも何とか仕事になってるし、パソコンがあれば何とでもなるし……あ、そういうことじゃなくて。

美和 はい？

光 ウチってね、うちの家族。傍から見たらとにかく円満家族だったの。

お母さんいい人だし、お父さんのこと言い出せなくて……。

美和 ……。

光 許したいのに許せないから。許さなきゃいけないって思うから苦しかった、家族だから。……親を悪く思う私は、なんて悪い子だって……我慢したら、このまま絵に描いた様に幸せでいられるって。でもそれって間違ってたんだよね。幸せって絵で見るもんじゃない。……ま

あその反動で、ここにいるんだけど。

美和 ええ。

光 だから怖いんだよね。家庭とか持って、幸せそうに見えて、でも陰で子供が私みたいな思いしてたらどうしようって。

美和 ……。

光 家族は多かったんだけどね。誰にも言えない秘密を抱えてるって言うのは孤独なの、寂しいの。私はずっと寂しかったから……。

美和 ……。

光 でも、やっぱり私も女だから。

美和 ……？

光 で、美和ちゃんにお願い……

美和 はい？

光 私の代わりに、人口を増やして。

美和 ……。

光 私には、到底無理だし。

美和 ……。

美和を見る光。

光 じゃあ、そういうことで。(行くこうとして)

美和 光さん！ ……っていうか、光さんも……！

光 (遮って) 無理なのよ、男の人が無理なの。

美和 ……。

光 ……。

美和 あの、私ね、

光 ん？

美和 ……もう自分のことバカっていうのやめるんです。

光 うん。

微笑み合う美和と光。

そこへ由宇が入って来る。

由宇 お風呂空いたよ。次、美和ちゃん？

光 (美和に) お風呂入んな。(由宇に) おやすみなさい。

由宇 お休み。

美和 ……。

目が会うが言葉が出ない二人。

由宇はゆっくりと窓の方へ近寄って行く。

由宇 ……雪、止んだね。

美和 そうですか。

少しの間

由宇 冷めないうちにお風呂入ってくれば、冷えたでしょう？

美和 どうぞ…お構いなく。

由宇 ……大丈夫だって。

美和 え？

由宇 何にもしないって、見張ってるんでしょ？ その人に、また何かするんじゃないかって。

美和 イヤー。

間

由宇 ……ごめんね。

美和 ……？

由宇 ごめん……ごめんなさい。(お辞儀)

美和 やめてください。

由宇 さつきは酷いこと。

美和 私も同じですから。……顔、上げてください。

由宇 (動かない)

美和 由宇さん？

由宇 自信、失くしちゃって。

美和 ……。

椅子に座る由宇。

由宇 美和ちゃんといるとね、本当はいつも苦しかった。

美和 え？

由宇 私の失くしたものの全部持ってるのよ美和ちゃんは。

美和 そんなことありません。私なんかいつもこの人達は凄いなあつて感心ばかりで……。

由宇 美和ちゃんの真似したら、また元へ戻れるんじゃないかって思った。悲しみとか怨みとか、そういうこと知らなかった自分に。目の前の人をいっぺんで好きになれた頃にまた戻れるんじゃないかって……。

美和 ……。

由宇 ……夢を、見てしまった。

美和 ……。

少しの間

由宇 似てるのよ美和ちゃんと私は。

美和 こここ、光栄です。

由宇 昔の私に似てる、事件に遭う前の私に。だから腹も立つし……愛しいの。

美和 ……。

由宇 けどもう無理、もう限界。もうここにはいられない。

美和 そこそ、そんな……私、気をつけて振る舞いますから。由宇さんに似ない様にしますから。

由宇 そうじゃなくて、私が無理なの。(堀内を見て) この人、何も悪くないのに。

美和 私も……自分に驚きました。一瞬だけど本当にこの人殺そうって思ったし、自分も死のうって思ったし……なんか盆と正月がいつぺんに来たみてえで……月並みな例えですんません。

由宇 ううん。

美和 ……知りませんでした。怖い。人って。

由宇 わからなくなっちゃった。何が正しくて、何が間違っているのか。

美和 ……はい。……きつと、みんな。

間

美和 私ね、

由宇 ……？

美和 この話、誰にもすたことが無かったんですけど。高校の修学旅行行かねかったの、本当は仮病だったんです。

由宇 ……？

美和 中学の修学旅行で、都会でツガンに遭って、

由宇 え？

美和 ああ、チカンです。……それがもうとにかくイヤで、恥ずかすくって誰にも言えなくて……まあ、大げさだって笑われそうですけど。

由宇 そんな。美和ちゃんの痛みは、美和ちゃんだけのものでしょう？

美和 ……なんで本当のこと話したんですか？

由宇 ……？

美和 すんません。

由宇 ……そんなにおかしい？

美和 私にはとても……恥ずかすくって。

由宇 私は、辛いことを辛いって言えない世の中の方がおかしいと思う。恥ずかしいと思う。私は、悪くないのに。

美和 ……はい。

由宇 それに悔しいじゃない無かったことにするなんて。忘れられない

つてことは、忘れちゃいけないことなのよ。

美和 ……。

由宇 誰が忘れても、私は忘れない。

美和 ……。

少しの間

由宇 ……知りたい？

美和 ……？

由宇 何があつたか。

美和 ……（うなづく）

由宇の隣に座る美和。

ゆっくりと話し始める由宇。

由宇 ……あの日ね……ただの一日……普通の日。友達と食事した帰り……小学校の裏の……人通りも少なくない道。……白いワゴン車が止ま……国道までの道を聞かれた。無視すればよかったんだけど、困ってる人は助ける様……につけられてきたから。……女の子は思……いやりがなくちゃいけないって。……だから教えてあげたら……買い……物袋を取られた……おもわず手を伸ばしたら車に乗せられて、ナイフ……で脅されて……シャツのボタンを……

美和 由宇さん。

由宇 ……聞きたくない？

美和 由宇さんが話したそうじゃないから……。

由宇 （少し笑って）良くある話でしょう？

美和 （由宇の手を取り、首を振る）

由宇 でも、生きて行かなくっちゃ。

美和 ……。

由宇 冷たい。

美和 え？

由宇 手。(美和を触って)体も。早くお風呂入ってきたら？

美和 ……大丈夫ですか？

由宇 ありがとう。この人、ちゃんと看とく。

美和 はい。じゃあ。

由宇 うん。

リビングから出て行く美和。

椅子に座りぼんやりと考えている由宇。

やがて堀内が寝返りを打つと、掛っていた毛布が落ちる。

しばらく堀内を見ていた由宇だが、思い切って堀内に近寄って行く。

勇気を出して堀内の毛布に手を伸ばす由宇。

落ちた毛布を拾い上げようと何度も手を伸ばすが、

どうしても怖くて触れない。

由宇が諦めた時、堀内が目を覚ました。

堀内 (寝ぼけながら由宇の手を強く握る)

由宇 ……!!!

堀内 ……ありがとうございます。

由宇 (怖い) 離して。

堀内 本当にありがとうございます。すみません……。

由宇 手を離して！ 離さない！

堀内 え？ でも……(手を離すと由宇が転びそうなので手を離せない)

由宇 離して！ お願い離して！ ……離して！

由宇の剣幕に思わず手を離す堀内。

その反動で由宇は床に崩れる。

堀内は由宇を気遣い手を差し伸べる。

堀内 大丈夫ですか？

由宇 (遮って) 来ないで！ (震えている)

堀内 ……。

由宇 ……。

由宇を見下ろしている堀内。

やがてゆっくりと堀内は由宇の目前に膝をつく。

体がすくんで動けない由宇。

堀内 ……ごめんなさい。

由宇 ……？

堀内 ごめんなさい……大丈夫ですか？ ……ごめんなさい……ごめ
んなさい。(お辞儀)

由宇 ……？

堀内 本当にごめんなさい……ごめんなさい……！
由宇 ……。

必死で頭を下げる堀内をジッと見つめる由宇。

騒ぎに他の住人たちも駆けつける。

黙って見ている由宇を不思議に思い、やがて堀内は顔を上げる。

堀内に恐る恐る近寄る由宇。

由宇を見つめる堀内。

やがて、由宇は堀内の頬にそっと手を差し伸べる。

暗転

第五場

一年後、春の初め。

テーブルにはたくさんの封筒が用意され、ロッキングチェアには鞆が置かれている。

下手では光がぶつぶつ言いながら奇妙な動きを繰り返している。

内職をしながら大声で話している緑里。

緑里 そうなんですよ、そうなんです。驚いたでしょう？ 私も驚きましたよ。大学でね、ほら、由宇さんつてもともと大学に勤めてたでしょ？ 戻ったんですよ元の大学へ。大学って言っても事務局らしいけど、由宇さん、働いてたんですね総務部。で、学生たちの前で話したんですって被害のこと、被害者心理を研究する授業で、自分でよければって名乗り出て。で、それがきっかけで、学生達と被害者支援の活動始めたって。

翔子 (キッチンから出てきて) 活動って？

緑里 さあ。なんか……

翔子 なんかって？

緑里 いろいろ……(困って) また聞いとく。

翔子 よく言ってみましたもんね由宇さん、「生きて行かなくっちゃ」って。

光 うん。

翔子 向き合うと強くなれるんでしょうか。……逃げないことで。

光 さあ……。

翔子 さあって？

光 信じるしかないんじゃないの？

緑里 戦って。自分と戦って……ああ、私には絶対に真似出来ない。だって怖いじゃないですか、どんな風に思われるんだろうって。

光 どうして真似するの、緑里さんは緑里さんでしょう？

緑里 ……。

光 それに由宇さんが戦ってるのは自分じゃない。……事件でも、犯人でもないと思う。

翔子 じゃあ、誰？

光 世の中……理解できないものを疎外しようって価値観と戦ってる
と私は思う。

緑里 ……余計に途方もないわ。

光 真似しなくたっていいって、逃げてても、向き合わなくても。生きてれ
ば。

緑里 ええ。

翔子 良かったですね。

緑里 ……？

翔子 イラストの仕事が軌道に乗って。

緑里 伊勢田さんこそ……来年も受けるんでしょう？ 法科大学院。

翔子 はい。

緑里 実家はどう？

翔子 ぼちぼちと。

光 うるさいんだから緑里さん、このまま弁護士になったら、翔子ちゃ
ん、また嫌な思いするかもって。

緑里 そりゃあ……伊勢田さんの判決、あのまま終わってるから。

翔子 そのことはもう。過去は変えられないし。

緑里 まあ……。

翔子 ただ、たくさん勉強して、いろんなこと経験して、自分で判断で
きるようになりたいと思って。何が正しくて、何が間違っているのか。

緑里 伊勢田さん……（涙ぐむ）

翔子 （光に）ねえ……さっきからそれ、何してるんですか？

光 知らない。

緑里 トンガラ節を改良してみたの、ミュージカル風に。ほら私って、
元ミュージカル部だったから。

光 知ってます。

緑里 今夜、披露しようと思って、伊勢田さんが久しぶりに遊びに来て
くれたんだもん。

翔子 だったら私、まだ見ない方がいいですね。（目をつむる）

光 いやいやいや、もう見たから。

堀内 (玄関から) 終わりましたー。

下手から鎌とロープを持った堀内が現れる。

光 遅い！

堀内 急ぎました。

翔子 か、鎌！

堀内 これは、外の雪囲いの撤去を。

光 ご苦労さま。

堀内 廃材は全てトラックに積みました。

緑里 ありがとうございます。

光 お米は？

堀内 えっと……。

光 郵便。

堀内 あの……

光 チョコレート。

堀内 それは、ええ……

光 返事も遅い。

堀内 すみません……

翔子 緑里さん、この人、

緑里 バイトしてるの鈴木スーパーで。

翔子 じゃあずっとこの村に？

堀内 はい。ええっと、お米は勝手口に置き、郵便は玄関の靴箱の上、

チョコレートは食品棚へしまいました。

光 その通り。助かりました。

堀内 毎度ありがとうございます。

翔子 じゃあもしかして、美和さん、由宇さんにくつついてったきりな
んですか？

緑里 由宇さんの活動の手伝いしてるんですって、「んだばー、わたし
にもなんか出来ることあつかもすんねー」って。

堀内 こないだ若奥さんから連絡ありました。旦那さんに、元気かって。

翔子　なんか、凄いですね。

光　ま、ようやく自我が芽生えたってとこね。

堀内　あはは……。

光　（堀内を見る）

堀内　……。

光　鎌は道具入れ、ロープはキッチンの戸棚ね。

堀内　はい、鎌は戸棚、ロープは道具入れ……逆か……。

光　……ったくもー。

翔子　（笑う）

キッチンへ行く堀内。

翔子は自分の荷物を持つ。

何となく窓の外へ目をやる緑里。

翔子　じゃあ私、ちよつと荷物片付けてきます。

光　わかった。

緑里　あ……あ、あ……！

光　どうしたの？

翔子　どうしたんですか？

緑里　……桜。

光　どこどこ？（緑里の元へ集まる光と翔子）

緑里　（窓の外を指して）ほら、向こうの枝、重なってるところの上の方。

光　（驚いて）……さすが緑里さん、目がいい。

緑里　……春ねえ。

光　それって遺伝ですか？　親譲りですか？

翔子　ホント。

光　見えるの？

翔子　いいえ……でも、咲いてますよきつと。

遠くの、まだ見ぬ桜を眺める三人。

堀内 (奥から) すみません、ロープは？！

光 だから道具入れ。ったく……。

翔子 (笑って) 大変……。じゃあ光さん、また後で。

光 ほしい。

下手より出て行く翔子。

緑里 明日、何時ですか？ 新しい人来るの。

光 たぶん三時ころ。

緑里 ……お部屋、お掃除しときますね。きっと、最初は部屋から出て来ないから。

光 お願いします。

緑里はリビングを出て行こうとするが、立ち止まり。

緑里 過去は変えられないって伊勢田さんは言ったけど、私は変えられると思ってるんですよ。

光 ……

緑里 未来が変われば過去も……捉え方が変わるんじゃないかって。もしかしたら。

光 ……。

緑里 そんな風にイラストも、描いて行きたいって。

光 ……なんですか急に。

緑里 (微笑んで) 何となく。

下手より出て行く緑里。

光 生きて……く……(?)

光は仕方なく、ラベル貼りの内職を始める。

そこへ上手から戻ってくる堀内。

堀内 ……あ。

光 遅い。

堀内 ……。

光 は？

堀内 急がば回れとも言いますので。……お手伝いしましょうか？ いえ。

光 ……。

堀内 じゃ。(行こうとして)

光 あんたさあ……いいんだからね、感謝なんかしないで。無理に手伝わなくても。

堀内 ええ。

光 言ったでしょう？ 見捨てようとしたんだから、あんたのこと。

堀内 でも助かりました。

光 ……。

堀内 あのね、回り道ばかりしてるとどうなるか知ってます？

光 ……さあ。

堀内 迷うんです、道に。結局。

光 ……。

堀内 ……だけど俺、思うんです。そんなに、早く着いても。ねえ。

光 ……。

堀内 いや。……じゃあ。

帰ろうとする堀内。

光 ……桜。

堀内 え？

光 咲いてるんだって、あっちの方。

堀内 へえ……ああ。

少しの間

光 別に命の恩人じゃないし、助けてなんかないし、迷っても知らない、道なんか。

堀内 ええ。

光 ……手伝ってくれる？

堀内 え？

光 これ、手伝って。

堀内 ああ……はい。

光に促されテーブルに着く堀内。

内職のやり方を教えてやる光。

春の光の中、黙々と作業を続ける二人。

おしまい